

研究課題:引きこもり予防に口腔機能維持は寄与するのか?

研究者名:長谷川陽子^{1,2}、定兼亜弓²、辻翔太郎³、玉岡丈二²、澤田隆³、岸本裕充²、小野高裕¹、新村健⁴

所属:

1. 新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野
2. 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座
3. 兵庫医科大学整形外科学講座
4. 兵庫県歯科医師会
5. 兵庫医科大学内科学総合診療科

高齢者は、口腔機能が低下することにより、結果的に運動機能の低下が関連していることが知られている。すなわち、高齢者の社会的引きこもりには口腔機能が関連していると想定されている。しかし、高齢者の引きこもり増悪と口頭機能との関係を検討した研究はほとんど見当たらない。本調査では、丹波篠山地域に在住する自立した高齢者を対象に、引きこもりと口腔機能との関係性を明らかにすることを目的とした。

参加者は、2016~2017年(ベースライン)までの自己管理アンケート(ベースライン)に参加した65歳以上の成人(ベースライン)で、2年後(フォローアップ、201~2019年)の427歳以上の高齢者。ベースラインでは、口腔機能と、引きこもりに関連する交絡因子(認知機能、身体機能、筋肉量等)に関連する17項目を評価した。引きこもりに悪影響を及ぼす口腔機能について、COX比例ハザードモデルを用いて検討を行った。

以下の要因は、引きこもりの増悪と有意に関連していた:残存歯数、歯肉状態、咬合力、咀嚼能率、飲み込み難さおよび口腔乾燥の自覚。また、歩行速度、認知機能、膝進展筋力が低値の場合は、有意に口腔機能が低下していることが示された。ベースラインで口腔機能低下を有した対象者は、問題のない人と比較して引きこもりが増悪する可能性が1.8倍高かった。

以上の結果から、口腔機能低下は高齢者における引きこもりの増悪と関連しているため、歯科治療により口腔機能を維持することが重要であることが推察された